

小児の事故とその防止に関する研究

保育園における事故防止プログラムの開発

主任研究者 田中 哲郎 国立公衆衛生院母子保健学部長
研究協力者 石井 博子 国立公衆衛生院母子保健学部

研究要旨：保育園における事故防止対策は、従来、施設の中での事故防止が考えられていたが、今回作成した保育園における事故防止プログラムは、園児の家庭での事故防止を、保育園と保護者が互いにコミュニケーションをはかることにより、子どもの事故を少しでも減らすことを目的としたものである。

子どもの意外に早い発達を、保護者が十分に理解していないために発生したと考えられる事故が少なくなく、それぞれが独立したパンフレットとなっているので、個々の子どもの発育・発達に合わせて、その時点より次の発達ステップまでに多い事故について配布や指導が行えるように、寝返りをはじめたら、物がつかめるようになったら、ハイハイをはじめたら、つかまり立ちをはじめたら、歩きをはじめたら、ちょっと走りをはじめたら、外遊び、外出をするときの8種類の事故防止パンフレットを作成した。

A. 研究目的

平成11年11月に東京都大田区内の保育園で実施した子どもの事故に対する保護者の考え方の調査結果より、保護者の7割以上が保育園での事故防止活動を支持しており、保育園で事故防止の情報を提供することは、事故防止活動の有効な手段の一つと考えられた。

発達段階のさまざまな時点において啓発を行うことは、事故を減少させるための効果的な方法であり、誕生から2歳前後においては、乳幼児の身体的な発達は著しく、身体能力の発達と同時に、思いがけない事故に遭遇する危険性も高まる。

この時期、保護者は特別な注意が必要となるので、家庭における乳幼児の事故を、保育園と保護者が互いにコミュニケーションをはかることにより、子どもの事故が減少できるよう、保育園で実施可能な事故防止プログラムを考案した。

B. 研究方法

パンフレットの記載項目は、平成9年度厚生省心身障害研究「乳幼児死亡の防止に関する研究班」で得られた14,612例の事故症例に、事故発生時の状況を自由記載する欄があり、この自由記載により事故の発生状況を具体的に把握した。

この乳幼児事故調査の結果に基づいて作成した、平成10年度厚生科学研究報告書で報告した「健康審査時を利用した安全チェックリストとその指導のポイント」を基本に、それぞれの発達段階に

おいて防止の必要性の高い事故を取り上げた。

C. 研究結果

対象は、誕生から2歳前後において発達の個人差の大きい時期対し、月齢や年齢のみではなく、その子どもの発育・発達に合わせて使用できるように、発達ごとに、①寝返りをはじめたら、②物がつかめるようになったら、③ハイハイをはじめたら、④つかまり立ちをはじめたら、⑤歩きをはじめたら、⑥ちょっと走りをはじめたら、⑦外遊び、⑧外出をするときの2種類の8部構成とした（図1）。

指導するおよその対象月齢・年齢は、「寝返りをはじめたら」は4～6か月、「物がつかめるようになったら」は6～7か月、「ハイハイをはじめたら」は8～9か月、「つかまり立ちをはじめたら」は10～11か月、「歩きをはじめたら」は12か月から、「ちょっと走りをはじめたら」は1歳半から、「外遊び」は1歳半から、「外出をするとき」は誕生からとした（表1）。

それぞれが独立したパンフレットとなっているので、必要に応じて配布や指導が行えるように作成した。また、保護者が理解しやすいように、子どもが発育発達することから起こる事故を解説してある（図2）。

具体的な実施方法は、毎日子どもに接し、子どもの発達状態や家庭の環境を良く周知している保育士または看護婦が、子どもの発達・発育にあわ

せて、パンフレットを保護者に手渡し、今後発生しやすい事故に対して、詳しい説明を加えたり、事故防止のための気配りや、対処の方法についてのアドバイスをパンフレットを利用して行うものである。

D. 考察

保育園における事故防止対策は、従来、施設中での事故防止が考えられていたが、今回作成したプログラムは、園児の家庭での事故防止を、保育園と保護者が互いにコミュニケーションをはかることにより、子どもの事故を少しでも減らすことを目的としたものである。

特に、平日子どもとゆっくり接する機会が少ない保護者が多いことや、子どもの意外に早い発達を十分に理解していないために発生したと考えられる事故が少なくない。したがって、このプログラムは、保育園の保育士、または看護婦が行うことにより、それぞれの子どもの発達にそった、きめ細かい指導が可能となった。

また、保育中ちょっと立つことができた等、発達の喜びを保護者と分かち合いながらパンフレットを配布することで、保育士と保護者とのコミュニケーションを円滑にするきっかけにもなる。

E. 結論

発達段階のさまざまな時点において啓発を行うことは、事故を減少させるための効果的な方法である。事故防止の指導については、健康診査時を利用した方法が考えられていたが、それと同時に保育園を基点とした事故防止指導が有効と考えられたことより、保育園で実施可能な事故防止プログラムを考案した。

保育園は子育て家庭に対する相談・助言の支援機能が求められていることから、このプログラムを実施することは社会的ニーズに答える上でも時代にあった対策であり、家庭内外での事故防止が計られると同時に、保育園内における事故防止に対する意識も高まり、事故の減少も期待されると思われた。

表1 指導する対象月齢・年齢

発達段階	対象月齢・年齢
① 寝返りをはじめたら	4～6か月
② 物がつかめるようになったら	6～7か月
③ ハイハイをはじめたら	8～9か月
④ つかまり立ちをはじめたら	10～11か月
⑤ 歩きはじめたら	12か月～
⑥ ちょっと走りをはじめたら	1歳半～
⑦ 外遊び	1歳半～
⑧ 外出をするとき	誕生～









<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その1></p>  <p>寝返りをはじめたら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その2></p>  <p>物がつかめるようになったら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その3></p>  <p>ハイハイをはじめたら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>
<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その4></p>  <p>つかまり立ちをはじめたら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その5></p>  <p>歩きはじめたら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その6></p>  <p>ちよつと走りはじめたら</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>
<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その7></p>  <p>外遊び</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	<p>子どもに安全をプレゼント</p> <p>乳幼児の事故防止<その8></p>  <p>外出をするとき</p> <p>乳幼児の事故防止 1. 乳幼児の事故防止 2. 乳幼児の事故防止 3. 乳幼児の事故防止</p>	

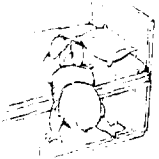
図2

寝返りをはじめたら

「寝ているから平気」という考えは事故のもとです。

1 ベビーベッドの柵はいつも上げていますか。


ベビーベッドからの転落事故は、赤ちゃんがまた動いていないから大丈夫と思ってベッドの柵を下けたままミルクを作りに行ったり、おもちゃを取りに行ったり、ベッドのそばをそよと離れたときに起こっています。



ベビーベッドに寝かせるときは必ず柵を上げておく。

3 ベビーベッドの柵とマットレスの間にすき間がありますか。

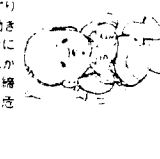
ベビーベッドの柵とマットレスや敷布団の間に、赤ちゃんの頭が入るようなすき間があると、頭はさまって動けなくなり窒息する危険があります。すき間ができてしまう場合には使用をやめるか、タオルなどですき間を埋めてから使用しましょう。



ベビーベッドの柵とマットレスや敷布団の間にすき間がないか調べて使用する。

5 よだれかけのひもを外してから赤ちゃんを寝かせていますか。


赤ちゃんは寝返りをしたりすり上がったたり、寝ている間も動き回ります。寝かせているときに首まわりのきつい服やよだれかけをつけていると、首まわりが締めつけられて窒息してしまう危険があります。



赤ちゃんを寝かせるときはよだれかけのひもは外す。

2 テーブル、ソファなどの上に赤ちゃんを寝かせたまま目を離すことはありませんか。


3か月くらいになると、赤ちゃんは手足をバタつかせ激しく動き、頭の方へすり上がったります。5か月を過ぎると、早い赤ちゃんは寝返りができるようになるので、テーブル、ソファなど高いところに寝かせるときは目を離さないようにしましょう。



テーブル、ソファなどの高いところに寝かせない。

4 赤ちゃんの顔のそばやベビーベッドの中に、ぬいぐるみをたくさん置いてありますか。


寝ている赤ちゃんのそばにぬいぐるみやタオルなどか置いてあると、寝返りをしたときに顔に埋まってしまい、鼻や口がふさがれてしまいます。また、掛布団などが顔に深くかかっているか、寝ている間でも時々様子を見るようにしましょう。



赤ちゃんの顔のそばにぬいぐるみやタオルは置かない。掛布団は顔に深くかけすぎない。

6 タバコや灰皿はいつも赤ちゃんの手の届かないところに置いてありますか。

寝はいいなり、好きなおもちゃをつかんで遊べるようになった赤ちゃんは、何でもつかんで口の中に入れてようとします。タバコは2cm以上食べてしまうと、命にかかわるといわれています。口に入れると危険なタバコが赤ちゃんの手の届くところがないか、いつも気をつける必要があります。




タバコや灰皿は赤ちゃんの手の届かないところに置く。

物がつかめるようになったら

目をちょっと離れたすきのキケンがいっぱいです。

1 タバコや灰皿はいつも赤ちゃんの手の届かないところに置いてありますか。

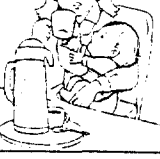
赤ちゃんは大人が口にくわえるタバコに興味をもっています。手の届くところにあるものがつかめるようになると、タバコや灰皿を床やテーブルの上に置いておくのは危険です。飲み残したジュースの缶や灰皿がわりに使うのもやめましょう。液体に溶けたニコチンは吸収が早く、ひと口飲んだだけでも危険です。



タバコや灰皿は赤ちゃんの手の届かないところに置く。

3 赤ちゃんを抱きながら、熱い食べ物や飲み物を食べたり飲んだり、料理することがありますか。


赤ちゃんはこぶしをふるったり、物をつかんだりができるようになると、大人の持っている物に手を伸ばそうとします。片手で赤ちゃんを抱きながら熱い食べ物や飲み物を扱うことは危険です。また、抱いている赤ちゃんが動いたり、誤って手から熱い食べ物や飲み物を振り落とすこともあります。赤ちゃんの皮膚はとでも薄く、洋服の上からでも大きなやけどを負ってしまいます。



赤ちゃんを抱きながら、熱い物を食べたり飲んだり運んだりしない。

5 赤ちゃんがお座りをするそばに、角や縁のするどい物がありますか。


一人でお座りができるようになって、まだまだ不安定です。赤ちゃんは頭が重いので、バランスを崩して前のめりになり、後ろに倒れたりするので、赤ちゃんのすぐそばに家具や敷居、かたい積み木などのおもちゃがあるとぶつかってしまいます。



赤ちゃんが座るまわりに角や縁のするどい物を置かない。

2 おもちゃは安全マークを目安に選び、プラスチックの薄い突起や、とがった部分がないか確認していますか。

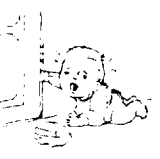
最近はおもちゃの種類も豊富になり、安全性にも配慮がなされていますが、子どもは大人が思いもつけないような遊び方をします。おもちゃは子どもの年齢や発達にあったものを選びましょう。また、遊んでいるうちにおもちゃが壊れてけがをすることもあるので、安全に遊べるかどうか、ときどき確認しましょう。



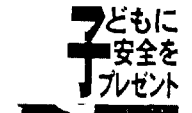
日本玩具協会が安全基準に合格したおもちゃに認定しているSTマークがついていても、プラスチックの薄い突起やとがった部分がないか、壊れた所がないか確認をする。

4 ドアのちようつがい部分に、赤ちゃんの指が入らないように注意をしていますか。

赤ちゃんの小さな指はちようとしたすき間にも簡単に入ってしまいます。赤ちゃんがドアをいたずらしているのに気づかずドアを開けてしまったり、開け放しておいたドアが強風で急に閉まって赤ちゃんの手がはさまれてしまう事故もあります。ドアの開閉をするときは、赤ちゃんの手の位置を確認しましょう。ドアのちようつがい部分に指が入らないようなカードをして防止するの一つの方法です。



ドアの開閉の際は、子どもの指の位置を確かめる。

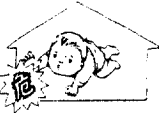


ハイハイをはじめたら

こまめなかつげを心掛けて事故を未然に防ぎましょう。

1) 赤ちゃんを家に一人置いて外出することがありますか。

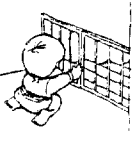
寝ている赤ちゃんだけを家に置いて、買い物などに出かける人を見られます。出かけるときは寝ていても、留守の間に目覚めてしまうことがあります。ハイハイができるようになれば、家の中を動きまわるので、いろいろな危険が待ち受けています。また、火災や地震などの災害時に赤ちゃんは脱出できません。自分自身で身の安全を守ることでない赤ちゃんを一人にしないようにしましょう。



赤ちゃんを家に一人残して外出しない。

2) 階段に転落防止の柵を取り付けましたか。

ハイハイが始まると目に映る物何にでも興味を示し、動きが活発になります。階段や段差があるところでは目が離せません。階段を上り下りできないように階段の上下には柵をつけ、玄関などの段差があるところには一人で通って行けないようにすることで転落事故の大部分は防げます。柵のすき間からすり抜け、転落する事故もありますので、格子の間隔や高さにも気を配りましょう。



柵は階段の上と下(1階部分と2階部分)の両側2か所に取り付け、開め忘れのないようにする。

3) ポットや炊飯器は赤ちゃんの手の届かないところに置いていますか。

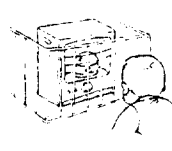
赤ちゃんはハイハイができるようになると、床や畳の上に置いてあるポットをひっくり返してお湯をこぼしたり、炊飯器の蒸気の噴出し口に手や顔を近づけてやけどをしてしまうケースが多くなります。ポットにはロックをかけて赤ちゃんがボタンを押してもお湯が出ないようにしておきましょう。



ポットや炊飯器は手の届かないところに置く。

4) ストープやヒーターなどは安全柵で囲って使用していますか。

ハイハイができるようになると、まわりにある物への関心はどんどん強くなります。ストーブにさわってしまったら、ヒーターの吹き出し口に指を入れてみたり、特に冬は暖房器具によるやけどが多くなります。最近のストーブ、ファンヒーターなどは熱源が露出しているものは少なくなってきましたが、熱源が直接出ているものは必ず安全柵で囲い、直接赤ちゃんがさわらないようにしておきましょう。



床に置くストーブやヒーターは必ず安全柵で囲う。

5) バケツや洗面器に水をためておくことがありますか。

赤ちゃんは10cmほどの浅い水深でも溺れてしまいます。バケツや洗面器に身を乗り出しているのをそのままにしておいたままに水を溜めつけておき、使った後必ず水を捨てておきましょう。水遊びをしているときは一人にしないことです。



バケツや洗面器に水をためておかない。

3どもに
安全を
プレゼント

つかまり立ちをはじめたら

テーブルの上やタンスの角など室内の安全を見直しましょう。

1) タバコや灰皿はいつも赤ちゃんの手の届かないところに置いていますか。

大人が口にくわえるタバコに赤ちゃんは強い興味を持っています。この頃は、タバコの誤飲事故が多くなります。つかまり立ちができるようになるとタバコや灰皿をテーブルの上に置いておくのは危険です。また、液体に溶けたニコチンは吸収が早く、ひと口飲んだだけでも危険なので、飲み残しのジュースの缶を灰皿がわりに使うのはやめましょう。



タバコや灰皿はいつも赤ちゃんの手の届かない場所に置く。

2) ボタン型電池、硬貨、ピアスなどの小物をテーブルの上に置いていますか。

電池のふたが開いて出てきたボタン電池を飲み込んでしまったり、テーブルの上に置いた小物をつまんで口の中に入れてしまうので、床・畳・じゅうたんやテーブルの上には口に入れると危険なものは置けません。自分の家だけでなく、外出するときにも注意が必要です。異物を飲み込んでしまった場合、普通は48時間以内に便と一緒に排泄されますが、ボタン電池の場合は食道や胃で電気分解を起こして壊れることがあるので、すぐに医師の診療が必要です。



ボタン電池や硬貨、ピアスなどの小物はテーブルの上に置いたままにしない。

3) 赤ちゃんがつかまり立ちをするときは、そばにいて注意してですか。

お座りしていたのに、いつの間にかつかまり立ちをする赤ちゃん。テーブルや椅子につかまり立ちをするときは大人がそばについていないとまだ不安定です。バランスを崩して転んでしまい、テーブルなどの角で顔や口を打ったり切り傷をしてしまいます。



赤ちゃんがつかまり立ちをするときは、そばにいて注意する。

4) 家具などの角のするどい部分は、クッションなどでガードがしてありますか。

つかまり立ちやつたい歩きはじめた赤ちゃんに転倒はつきもので、目の高さにある家具や柱の角に、頭やおでこをぶつけてしまいます。家具類はなるべく丸みのあるものを選び、角にはクッションテープなどを取りつけ、ぶつかった時の衝撃を和らげる工夫をしておきましょう。



家具などの角のするどい部分には、クッションテープなどでガードをしておく。

5) テーブルクロスを使用していますか。

食卓にテーブルクロスをかけていると、赤ちゃんがつかまり立ちをするときに引っ張ることがあります。その上に熱い食べ物や飲み物が置いてあると、こぼれてやけどをしてしまいます。



テーブルクロスは使用しない。

6) お茶やコーヒー、味噌汁、カップラーメンなどをテーブルの端に置くことがありますか。

赤ちゃんは物がつかめるようになると、熱い物にも平気で手をかけてしまいます。お母さんが食事の準備中、テーブルの上のコーヒーやカップラーメンをひっくり返してやけどをしてしまったり、食事のときも赤ちゃんの手の届くところに熱いものは置かないようにしましょう。



熱い食べ物や飲み物は赤ちゃんの手の届かないテーブルの中央に置く。

7) テーブルや棚の上にある食器やビン・缶などは、赤ちゃんの手が届かないようにしてありますか。

テーブルの上に置いてあるコップを落として、割れた破片を踏んでしまったり、缶詰やジャムのビンを足の下に落としてしまったり、手の届くところにある物に興味をもってさわったり、引っ張ったり、押しつぶしたり、切り傷や打撲事故の原因になります。



テーブルや棚の上にある食器や重いビン・缶などは赤ちゃんがさわれないようにしておく。

8) 子ども用の椅子は安定のよいものを使用していますか。

椅子に座っているときにテーブルを足で蹴った勢いで椅子が倒れたり、椅子に急に立ち上がって転落する事故があります。頭が重くバランスの良くない赤ちゃんは、椅子などの高いところから落ちやすいので、子ども用の椅子は安定の良いものを選びましょう。また、ハイチェアへ乗り降りするときは大人が行うようにし、安全ヘルムを必ず開けましょう。



からだの大きさや、SGマークを基準に、倒れにくいものを選ぶ。

歩きはじめたら

子どもの目線でケケンな物を取り除きましょう。

1) 子どもが歩くときは、つまずきやすい物や段差がないか注意していますか。

歩き始めは足かみつれて倒れたり、床に出ているおもちゃや敷居につまずいて頭を打つことが多く、まだまだ大人がそばについていないと不安定です。転んでも危なくないように、敷居や段差の角はクッションテープなどでカバーしておきましょう。



子どものまわりに、つまずきやすい物や段差がないか確認する。

2) 階段や玄関など段差のあるところに子どもが一人で歩くことがありますか。

玄関に歩いて行って転落したり、階段を四つん這いで上がって転落したりします。赤ちゃんはちょっと目を離したときに、思わぬところに移動しています。転落の危険のある場所にはドアに鍵をかけたり柵をつけて、一人で歩けないようにしておきましょう。



玄関や階段などの段差のあるところは、子どもが自由にいけないようにしておく。

3) 熱い鍋やアイロンは子どもの手の届かないところに置いてありますか。

ちょっと目を離したときに、カスレンジからおろしたりのやかんや熱い鍋をさわってしまったら、ひっくり返してやけどをしまう事故がみられます。使い終わったらかなりのアイロンの温度は90度です。温度を冷ますときも手の届かないところに置きましょう。



熱い鍋やアイロンは子どもの手の届かないところに置く。

4) タバコが入っているバッグを子どものそばに置くことがありますか。

子どもは好奇心が旺盛なので、大人が物を出入れするバッグが気になるります。バッグの中には、小銭や化粧品、真などの精緻事故につながる物もたくさん入っています。バッグの中に入っているのは大丈夫かと思っ、子どものそばに置いたため、目を離したときにバッグの中からタバコを出して食べてしまう事故が起きています。



タバコはいつも子どもの手の届かないところに置く。

5) かみそり、包丁、はさみなどの刃物は使用したら必ず片付けていますか。

まな板の上に置いてある包丁をどうして、足の上に落ちてしまったり、洗面台のかみそりを握ってしまったら、子どもは大人が使っているものに興味を持ち、まな板を自分も使ってみようとして、刃物を使用したらすぐに収納場所に片付けましょう。収納場所は鍵をつけるなどして、簡単に開けられないようにしておきましょう。



かみそり、包丁、はさみなどの刃物は使用したらすぐに片付ける。

6) 入浴後、浴槽のお湯は抜いていますか。

お母さんがシャンプーしている少しの間でも、浴槽のぞきこんで落ち溺れてしまうことがあるので、浴槽の外にいるからといって安心はできません。掃除をしようとして浴室のドアを開け放しておいたら、浴槽で溺れたり、入浴しようとして浴槽のふたを開けておいたため転落して溺れてしまうこともあります。浴槽のふたはたわみにくい物にして外すときは入浴直前に、入浴後はお湯は抜いておきましょう。



入浴後、子どもが小さいうちは浴槽のお湯は抜いておく。

7) 子どもが一人で浴室に入れないようにドアには鍵をつけていますか。

じっとしていることが少ない一人で歩いていってしまうの危険。知らないうちに浴室に入ってしまう、浴槽のぞきこんでいて転落し、溺れてしまう事故が起きています。浴室のドアは開け放しにせず鍵をかけ、出入りできないようにしておきましょう。鍵は外側上部に日曜大工などで簡単に取り付けられるもので十分です。



子どもが簡単に浴室に入れないようにドアには鍵を付ける。

8) ビニール袋やラップは子どもの手の届かないところに片付けていますか。

シールやラップをはがして遊んでいて、飲み込んで喉に詰まらせてしまったり、ビニール袋を頭からかぶって遊んでいて、鼻や口をふさいでしまうことがあります。スーパーやコンビニのビニール袋をおもちゃ代わりには遊ばせるのは危険です。また、壁にかけてある袋やひもに首をひっかけて窒息する事故も起こっています。



ビニール袋やラップは子どもの手の届かないところに片付ける。

ちょっと走りはじめたら

ころびやすい時期なので細心の注意を払きましょう。

1) 子どもが遊んでいるまわりに、つまずきやすい物や段差がないか注意をしていますか。

床に出ているおもちゃや掃除機のコード、めくれあがったカーペットにつまずいて転んだりします。子どもは足もとを見ないで走り出すので、ちょっとした段差にもつまずいて転びます。ある程度の高さのある段差は理解できますか。ちょっとした段差は逆に危ないので注意が必要です。



子どものまわりに、つまずきやすい物や段差がないか確認する。

2) 階段を上り下りするときは、大人がいつも子どもの下側を歩くか、手をつないでいますか。

階段を上り下りするときは、転んでも変えられるように子どもの下側を歩きましょう。最初は後ろ向きにハイハイをして降りるようにし、歩いて上り下りができるようになったら手を取ったり子どもの横か下側を歩きましょう。また、大人の目が離れることがあっても一人で上り下りしないように階段の上下端には柵を付け、階段からの転落事故を防ぐことができます。



階段の上り下りは、大人がいつも子どもの下側を歩くか手をつなぐ。

3) ペンやフォーク、歯ブラシなどをくわえて、走り回ることがありますか。

口に物をいれたまま歩いて走り回っていると、転んだときに口の中を切ってしまう、歯を突いてしまう危険があります。手に持っているものは、転んだときに突き刺してしまいます。



ペンやフォーク、歯ブラシなどをくわえたまま走り回らせない。

4) ベランダや窓のそばに、踏み台になる物を置いてありますか。

ベランダや窓の向う側の景色は子どもの興味をひきつけます。転落したときの被害は大きなものとなります。ベランダにはポリ容器、ビール瓶のケース、新聞の束、高さのある植木鉢など、踏み台になるようなものは置かないようにしましょう。



子どもがのぞきこめる窓には安全柵を付け、窓の割やベランダには、踏み台になるようなものは置かない。

5) 食事の準備をしているとき、子どもが熱い物にさわれないようにしていますか。

フライパンや鍋の取っ手にふれてこぼれてしまったり、コンロから降ろしたばかりのやかんややかんにさわってやけどをしてしまったら、食事の準備をしている台所は子どもにとって危険な場所のひとつです。コンロの上の鍋やフライパンの取っ手は内側に向けて手が届かないようにしておき、熱い物にさわるとやけどをすることを教え、食事の準備をしているときは子どもの位置を確認しましょう。



食事の準備をしているときは、子どもを台所に入れない。

6) 医薬品、化粧品、洗剤などは子どもの手の届かないところに置いてありますか。

子どもは大人のまねをしたがり、引き出しや冷蔵庫に入っている薬を取り出して誤飲してしまいます。また、お母さんが使う化粧品や洗剤も興味や好奇心があるので、浴室・洗面所・トイレ・台所に無造作に置かないようにしましょう。誤飲の場合、吐かせた後、吐き出した物があるか、また何を食べたかなどが落ちついて判断することが必要です。



薬は手の届かないところに置き、不要になった物は捨てる。化粧品や洗剤は鏡の中に保管し、誤飲されないようにしておく。

7) 子どもが引き出しやドアを開け開けて遊んでいることがありますか。

引き出しを開け開けて指をはさんでしまったり、引き出しを出してよじ登りタンスが倒れてはさまれたりします。子どもの背丈からいってもサッシのカギの部分はいたずらしたくなるようなので、簡単に開けられないようにしておきましょう。気密性の高いサッシに指をはさむと、ひどい場合は骨折をしています。



引き出しやドアを開け開けて遊ばせない。

8) ビーナツやあめ玉などは子どもの手の届かないところに置いてありますか。

子どもの口の大きさは最大32mmなので、これより小さな物は飲み込み危険があります。おもちゃの口の中に入ってしまったら、食べ物や飲み物と一緒に飲み込んでしまったりします。子どもの喉はまだ未発達なので、気管に物が入りやすく、ビーナツや粒豆などの豆類を与えるのは危険です。豆類は赤ちゃんの気管をふさぐ大きさです。気管に入っているのに気がつかないで、肺の炎症を起こしてしまいます。



ビーナツは3歳を過ぎるまでは与えない。

9) 子どもが浴室のドアを開けて一人で中に入ることがありますか。

子どもが知らないうちに浴室に入り、浴槽のぞきこんで転落し溺れてしまう事故が起きています。浴室のドアは開け放しにせず、鍵をかけておきましょう。浴槽の蓋は入浴直前に外し、入浴後はお湯を抜いておきましょう。



子どもが簡単に浴室に入れないようにドアには鍵をかけておく。

外遊び

地域の危険区域などを知り子どもの行動範囲を確認しましょう。

1 子どもが外遊びをするとき、つまずきやすい物や段差がないか注意していますか。

子どもは体のわりに頭が大きく重心が高いため、バランスを崩しやすく転びます。近づいて足がもつれたり、スクーター、三輪車に乗って石や段差で転倒します。まだまだ上手に手をつくことができません。顔面からアスファルトやコンクリートに転倒して重傷を負うことがあります。サイズの合わない靴も転倒の原因になります。



子どものまわりに、つまずきやすい物や段差がないか確認する。

2 子どもの遊んでいる位置を確認していますか。

庭で遊んでいたと思ったら道路に出ている、三輪車をこいだり、ボールを投げて道路に飛び出したり、止まっている車の後ろで遊んでいた、遊具の裏側で遊んでしまったり、お母さんがしゃべりに夢中になっているわずかなときに、子どもは思いがけないところに移動します。子どもは遊びに夢中になると、まわりに注意を払うことができなくなります。



子どもは思いがけないところに移動するので注意する。

3 遊具の安全を確認していますか。

おもちゃや遊具の大部分は安全に設計されていますが、釘が出ている、ぬじかゆるんでいる、さびていたり、濡れて滑りやすくなっているなど事故につながります。子どもの年齢や能力にあった遊具を選び、安全を点検してから遊ばせましょう。また、公園などで遊ぶときは、遊具の安全を確認し、遊び方に注意しましょう。



遊具の安全を確認してから遊ばせる。

4 すべり台やブランコの安全な乗り方を教えていますか。

すべり台で前を滑っている友達を後ろから押したり、ブランコに立ち乗りをしていて転落したり、ブランコの足を横切って戻ってきたブランコに当たったりします。子どもは決まった遊び方では物足りず無理なことをしようとします。安全に作られている遊具でも遊び方を誤れば事故の引き金となります。ルールを決めて遊ばせましょう。



遊具の安全な遊び方を教える。

5 水遊びをするときは必ず大人が付き添っていますか。

水遊びは子どもを開放的な気分にする遊びですが、わずかな水深でも溺れてしまいます。夏場だから、庭のビニールプールだからと安心して目を離すと大変危険です。ビニールプールは遊んだ後は必ず水を流して伏せておきましょう。



水遊びをするときは必ず大人が付き添う。

6 子どもだけで川や池に遊びに行くことがありますか。

友達同士と外で遊ぶことが多いので、住まいの近くの池や川、浄化槽や防火槽など子どもが落ちる危険がある場所がないか確認しておきましょう。バランスを崩して転んでしまうと、流れても流れのある川では子どもは簡単に立ち上がりません。崖から川や池、水櫃などに近づかないように注意しておきましょう。



子どもだけで川や池に遊びに行かせない。

7 三輪車や自転車は車が通らないところで乗っていますか。

まだまだ交通ルールがわからず、遊びに夢中になってしまうと周囲に注意を払うことができません。道路で遊ぶことは非常に危険なので、安全な場所で乗るように教えましょう。



三輪車や自転車は車が通らないところで乗る。

外出をするとき

その都度安全確認をして外のキケンから守りましょう。

1 自動車に乗るとき、チャイルドシートを後部座席に取り付けて使用していますか。

生まれたばかりの赤ちゃんでも、抱き抱えて自動車に乗せるのは危険です。車が衝突したり、急停止の衝撃で、どんなにしっかり抱いていても、赤ちゃんは腕から飛び出してしまう。車の速度がゆっくりでも衝撃のエネルギーは予想以上に大きく、大人の手の力では支えられません。また、歩けるようになるとチャイルドシートになかなかはまってもらえないので、抱きかえたり使用しない車で乗せてしまいかちですが、一緒に後部座席でシートベルトをしてみせたり、好きなおもちゃを持たせたりして慣れさせ、チャイルドシートは必ず使用しましょう。



車に乗せるときは年齢にあったチャイルドシートを後部座席にしっかり取り付け使用する。

2 子どもを車の中に一人で乗せておくことがありますか。

暑い季節に子どもを自動車の中に残したままにしていると脱水を起し、時には死亡事故につながることもあります。日中の車内は短時間でも驚くほど温度が上昇し、簡単に40～50度になります。



子どもを決して車の中に一人で残しておかない。

3 赤ちゃんをクーハン(かご)に寝かせて持ち上げるとき、両方の取っ手をしっかり握っていますか。

クーハンの扱いに慣れてくると、取っ手を片方しか持っていないのに気づかず持ち上げて赤ちゃんを落としたり、持ち運んでいるときに取っ手がとれて寝ている赤ちゃんが転落してしまう事故があります。



赤ちゃんをクーハン(かご)に寝かせて持ち上げるとき、必ず両方の取っ手を握っているのを確認する。

4 ベビーカーに乗せるときはベルトを締められていますか。

ぶら下げている重い物袋の重みでベビーカーがひっくりかえってしまったり、赤ちゃんがいきなり立ち上がって転落してしまう事故があります。シートベルトを必ず締めましょう。



ベビーカーに乗せるときは必ずベルトを締める。

5 道路を歩くときは手をつないでいますか。

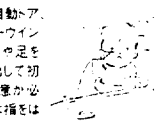
子どもが急に走り出したり、車道に飛び出したりする危険があります。子どもと道路を歩くときは手をつないで、大人が車道側を歩きましょう。



道路を歩くときは手をつなぐ。

6 トアを開閉するとき、子どもの手や足の位置を確認していますか。

子どもの行動範囲が広がると、自動ドア、エレベーター、車のドアやパワーウィンドウなど、いろいろなところで手や足をささむ事故が多くなります。外出して初めて経験する場所では特に注意が必要です。トアを開閉するときには指をささないように注意しましょう。



ドアを開閉するときは、子どもの手や足がどこにあるのが確認する。



7 子どもを乗せる自転車の後輪にはガードを付けていますか。

子どもを自転車に乗せていて、後輪に足の指やかかとをささむ事故が起っています。子どもを自転車に乗せるときはガードがしっかりとついた補助椅子を使い、足が巻き込まれないようにトレスガードの付いたものを使用しましょう。



自転車の後輪にはガードを付ける。

子どもに安全をプレゼント

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨：保育園における事故防止対策は、従来、施設の中での事故防止が考えられていたが、今回作成した保育園における事故防止プログラムは、園児の家庭での事故防止を、保育園と保護者が互いにコミュニケーションを図ることにより、子どもの事故を少しでも減らすことを目的としたものである。

子どもの意外に早い発達を、保護者が十分に理解していないために発生したと考えられる事故が少なくなく、それぞれが独立したパンフレットとなっているので、個々の子どもの発育・発達に合わせて、その時点より次の発達ステップまでに多い事故について配布や指導が行えるように、寝返りをはじめたら、物がつかめるようになったら、ハイハイをはじめたら、つかまり立ちをはじめたら、歩きをはじめたら、ちょっと走りをはじめたら、外遊び、外出をするときの8種類の事故防止パンフレットを作成した。